



Pure 純 No.182 Pacific パ Nov.2015

純パの会会報「純パ」第182号

2015年11月28日発行／発行：純パの会

究極の弱小球団を応援した私

野川 忍

福岡ソフトバンクホークスが、球団史上初の日本シリーズ連覇を果たした。こんな日が来るとは夢想不到にできない頃に「南海ホークス」のファンとなった私からすると、現実の事とは思えないほどの感慨である。

わがホークスは、究極の弱小球団であった。なぜそう断言できるか。日本のプロ野球も80年ほどの歴史があるが、栄枯盛衰激しい中で、「20年連続Bクラス」という「金字塔」(?)を打ち立てたのはわがホークスだけであり、おそらく、空前はもちろん、絶後でもあろう。

忘れもしない1977(昭和52)年、ホークスは野村克也監督を解任した。この選択自体についてはさまざまな意見もある。しかし、事実として、この年を最後にホークスは深く長い低迷期に入ったのである。そう、1978年から始まって、途中親会社が変わって福岡ダイエーホークス時代の1997年までの丸20年間、ホークスは一度も3位以上に上がることとはなかった。よくて4位、定位置は最下位かブービーである。

私がホークスのファンとなったのは、まさにこの1978年であった。千葉と東京で育ち、ご多聞に漏れずジャイアンツのファンにしかねなかった少年時代を脱却したのは、野村や門田博光の活躍が格

好よかったことに加え、水島新司氏のマンガ「あぶさん」の影響もあったことは否定できない。

野村から廣瀬叔功へ、廣瀬からブレーザーへ、ブレーザーから穴吹義雄へ、穴吹から杉浦忠へ……監督がいくら代わっても、低迷は変わらず、「9回までリードしていて、9回裏に劇的なサヨナラ負け」をいやというほど繰り返し、また開幕試合で6対2でリードしていた阪急ブレーブスを相手に、9回裏にブレーマーの満塁ホームランで同点に持ち込まれて、引き分けに終わってしまったという試合(1987年)もあった。そして、オールスターゲームには二人しか出られないという時代が長く続いていた。

この間、いわばムキになって南海ホークスのグッズを買い集め、東京からわざわざ大阪まで出かけて、あの大阪球場で声をからして応援し、後楽園球場ではファイターズ戦の三塁側で、絶望的試合を最後まで見届けたことを懐かしく思い出す。

現在の若いホークスファンには、ここに至るまでにどれだけ多くの選手、関係者、ファンが辛酸をなめつくしたかに、ちよっぴりでもよいから思いをめぐらせて欲しい。

栄光は、苦難の後にしかつかむことはできない。過去の教訓をかみしめながら、来シーズンのさらなる飛翔を期待したい。